

日本の歯科技工 の在り方を議論

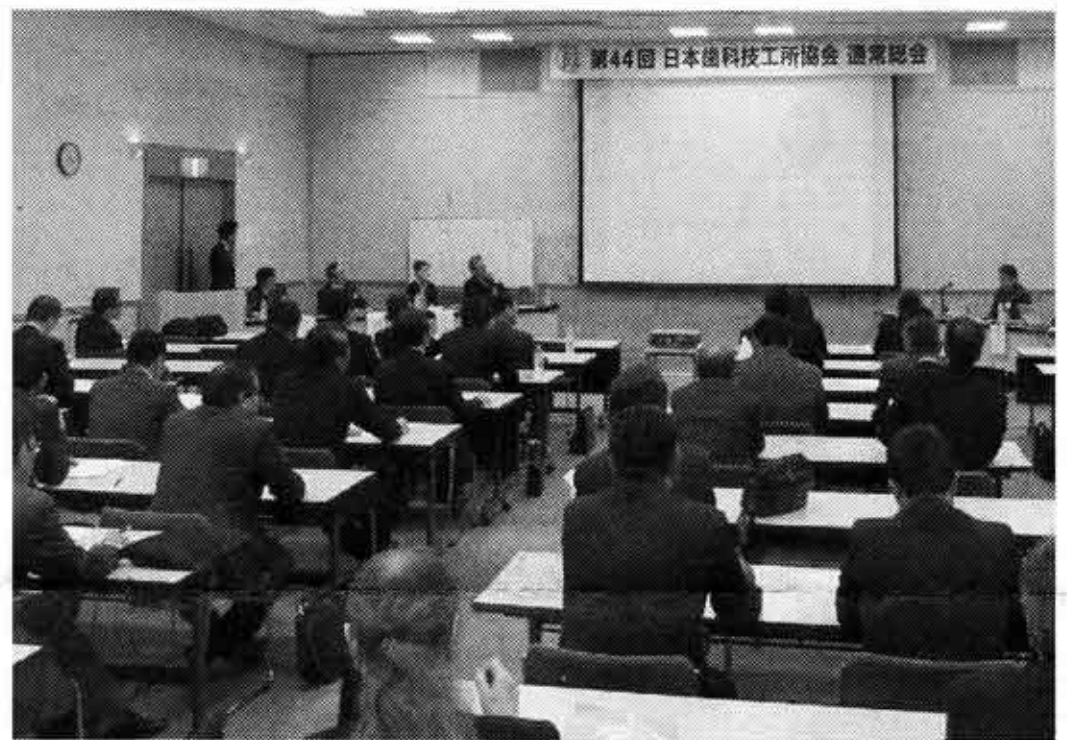
歯技協

日本歯科技工所協会（畠中實理事長）は歯科技工所経営者、企業、日本歯科技工士会役員、マスコミ関係者をパネラーに迎え、シンポジウム「今、我々に出来ること」を9日、開催した。静岡県浜松市のキャリアック（商工会議所福利研修センター）での第44回通常総会終了後に行われたもの。

シンポジウムでは海外歯科技工問題やCAD/CAMを始めとした機械化など、日本の歯科技工の環境が大きく変化している中、歯科技工士はどうあるべきかについて、活発に意見交換した。コ―ディネーターは同会中支部長の白石政二郎氏。パネラーの和田精密歯研社長の和田主実氏は、

統計資料のデータなどを基に歯科技工の現状や、今後の歯科技工士像を語った。労働環境の悪化については、独立が前提の「使い捨て」の雇用、経営者としての意識の欠如など、ラボ経営者の怠慢の可能性を指摘。直接請求については「仮に実現されたとしても、自由競争原理がある限り、その通りにはならない」と述べた。そして歯科技工士免許制度について、「国民の利益（医療の安全性）を守るためのもので、職の既得権としてしがみつくものではなく、ましてや既得権取得という技工学校入学促進のための特典でもない」と語った。

その上で「（技工）スタイルを変えないのはこだわりではなく、慣れたことだけをしたいわがまま。機械や海外に勝つためには自分や自社の付加価値を高めるべき」とした。



様々な立場のパネラーが集ったシンポジウム

して、歯科技工物の「物との表現に違和感を感じてきた。我々はモノづくりでなくて健康づくりをしている」と強調。医療費の健全化が求められていると問題提起した。

朝日新聞出版社・週刊朝日編集部記者の永井貴子氏は、取材を通じて分かったこととして、近い将来、大きな利益を得た中国歯科技工所による日本の歯科技工所買収の可能性を述べた。そして、中国人の歯科技工の留学先で、日本が米国、ドイツに

次いで3番目との話を紹介し、「日本が世界一だと思っているのは我々だけかもしれない」と厳しい見方を示した。また、同社が昨年発刊したムック「Q&Aでわかる いい歯医者」の反響の大きさを挙げ、「歯科の技術、歯科技工物に関して信頼できる情報を見られるものが欲しい」と述べた。ま

た、難しい専門用語が多い、分かりやすく書かれた本がほしい、メディアをもっとうまく活用してほしいなどと患者の立場から要望した。

総括を含めコメントした畠中理事長は、協会が作成した「セーフティース」のポスター配布に、各方面から賛同や応援の声が寄せられていると述べ、更に勉強を重ねる必要性を説いた。

来賓の日本歯科技工士教育協議会会長の末瀬一彦氏は、「4年の教育を経て資格を取った歯科技工士は、公務員、研究員になる人がほとんどだが、それでいいのか」「中国を敬遠するだけでなく、日本のライセンスを国際ライセンス化する、もしくはもっと主導的な立場になることなども考えるべき。いつまでもナンバーワンを誇示できない」などと訴えた。

松風営業本部営業部学術課長の岡田尚士氏は、中国など近隣諸国の歯科技工が、日本と同レベルの高品質な歯科技工物の提供を目指している状況などを伝え、「日本の歯科